

お母さん、大丈夫だったよ！

山田ふみさん（仮名）は同和地区に生まれ、介護士として長い間地域の高齢者に関わってきた人です。ふみさんとは古くからの知り合いで、いろいろなことを話してくれました。

突然の別れ

私は、20代の頃、福岡市内の自動車販売店に勤めていました。そこで同じ職場の人を好きになり、お付き合いを始めました。

お互いが行き来し、楽しい日々を過ごしていたある日、彼が住んでいた町に行きました。その時、

「このあたりには恐ろしい所がある」

と言われました。父が家庭も振り返らないほど部落解放運動の先頭に立って活動していたので、その言葉の意味は直ぐに分かりました。しかし、その時は何も言えませんでした。それから不安を抱えながらもお付き合いをしていました。

ある時、どうして知ったか分かりませんが、私が同和地区出身という理由で、

「つき合いも、結婚もやめよう」

夕方になって、

「お母さん、大丈夫だったよ」「向こうのお父さんからも仲良くしてがんばれと言われたよ」

と連絡があると、ヘタヘタと腰が抜け座り込むような気持ちになりました。それでもあまりに嬉しくなって高齢者に、「大丈夫だったよ」の返事を伝えると、「ワー」と大きな歓声が起こり、「よかったね、ふみちゃん」「私もうれしかあー」などの声と同時に拍手が湧き起こり、みんなの顔が笑顔になったことは忘れることができません。

わが子が成長するにつけ、いつ私と同じ経験をするか、不安と恐ろしさを胸にかかえ、ずっと過ごしてきた私もこの時ばかりは本当に安心しました。

今、息子は二人の子どもに恵まれ、連れ合いさんに支えられながら幸せに暮らしています。しかし、部落差別が今もある中で、私のように同和地区に生まれたという理由で結婚を拒まれている人や結婚することをためらっている若者がまだいることを、多くの人に知って欲しいです。そして、私が受けたつらい差別経験は、私だけで終わって欲しいと心から願っています。

と言われました。

私は、この先結婚もできないのかという思いになり、何でも奪っていく部落差別を憎み、親も恨みました。悲しみのあまり、生きていく気力さえもなくなっていきました。しかし、懸命に差別をなくす運動をしている父親や夜遅くまで働いて生活を支えていた母親の姿を思い出すと、とても死ぬことはできませんでした。

息子が彼女の親に会って

それから25年ほどたって、私の息子にも好きな人ができていました。

ちょうど同和地区の高齢者の研修に行っていた時のことです。

その日は、息子が同和地区出身であることを話し、結婚したいことを彼女の親に話す日でした。親としても心配で心配でたまらない日でした。私は高齢者に

「今日、息子が彼女の親に会って、自分のことを話し、結婚の許しをもらおうよ」

と話しましたが、その時はみんなシーンとしていました。今考えると、研修に参加している多くが自分の差別経験と重なって何も言えなかったのです。

流した涙を無駄にしないために

ふみさんは、涙を浮かべながら、時には声を詰まらせながら自分が受けた結婚差別のことを話してくれました。そのことは、誰にも話したくないことだったと思います。しかし、私を信じて「差別の苛酷さを知って欲しい、部落差別をなくしてほしい」という一念で、勇気を振り絞って話してくれたと思います。

話を聞いていく中で、私も体が震えてくるような気がしました。同時に、二世代三世代にわたってふみさん達に覆いかぶさってくる部落差別を現存させているのは、私たち自身であることに気づかされました。

ふみさんに流させた涙を無駄にしないために、私は多くの人に「部落差別は許されないことであり、明確な人権侵害であること」を伝え、一人ひとりの人権が大切にされる筑紫野市をみんなですくっていききたいと心から思っています。

